本草妙象錄

乙

へ13
2132
13

山津伊

13

陽腎男先生選定

娥二兩家女粲愛春
霞輕雲蔽月影流
風廻雪華徘徊楊
柳下遠眺送暮鴉
嫣然不歸奈有客
且同車二一妃脈二
語婀娜實與花願
言結金石一旦何
咨嗟千秋但可久
婉孌豈足誇

右二妃歌賦贈
陽腎男先生
承露主人

中南巡遊

春日
路傍
情

124

2132
13

本草妓要敘

蓋余年十四五時既得知其遊而知太夫而知引舟雛妓之辞又知傾城町之大必有若人而出乎數千年之間也不在異國其在

此乎非我之古則在于今
乎後數十年余來于楊屋
乃始見太夫於某之所太
夫業已全盛如雲四方之
客接踵最後獨得陽腎男
而驩矣驩則遂令罔祿抗

衡於全盛之粹者太夫邪
非邪腎男邪非邪則雖不
盡腎男哉是亦太夫哉

承露主人題

本草妓要敘

金之可溜而足以疚苦者必嗇甫之事也其次始末之事也余於渡世既無所窺竊謂妓邑之遊雖無助于身臺家督之固然能善人付合療人初心酒可令旨歌可使妖無爲祝言而能有識夫婦之塩梅不爲毀懲有

窮色事之奥義言不隨野父之議用
有至此道之粹家業商買之外或可
以愧小謡而勝猶粹也乎初則謂妓
遊與慇懃不同忍戀當有眞實手管
不欲輕施若妓遊所以使金使錢自
樂無酒不興無歌不娯恣情極態不
遺餘念苟色道之可觀倘不至諸訳

之未熟也乎
交喜甲戌歳陽月望賢男陽書于
燕譃堂

本草妓要凡例

一凡妓之美惡真偽固漂客之所當識辨妓不真美苟不可買譬如白人祇園町島内産爲眞未熟素人者爲美下品下劣者爲惡稱新地中白者爲偽物即是賤妓之類也諸如此類不可枚擧今用賤妓之

類而謂用白人肉尚不美而歸咎於妓物既非眞宜乎肉之不美也此漂客之識妓所以最爲先務也

一是書不錄氣味何則以妓之美惡不由氣味也神農本艸所謂氣者離逢振懸也味者戶立土器章魚津也如太夫天神耽之身上覺寒賤妓惣嫁當肌即識冷白人藝子之甘花車之辛中居之鹹是已此其氣味尤著者也

一凡妓女自江口神崎始列三百六十五人島原吉原新町亦同其數以來白人湯女靜女挑者諸家妓品漸增至二千餘種妓之可買者

不可勝擧今唯取遣繰尤著耳

陽賢男識

本草妓要目録

太夫　天神
白人　藝子
賤妓　惣嫁
已上六品
引舟　雛妓

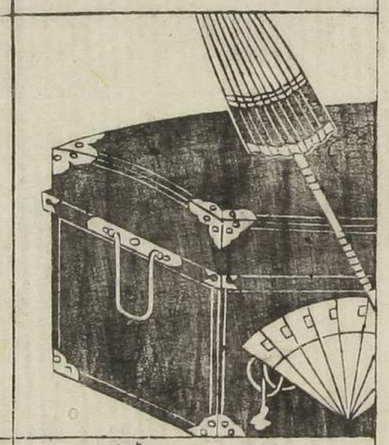
端女臈（ハシジョロウ）　湯女（ユナ）
静女（コソ）　比丘尼（ビクニ）
月切（ツキガコヒ）

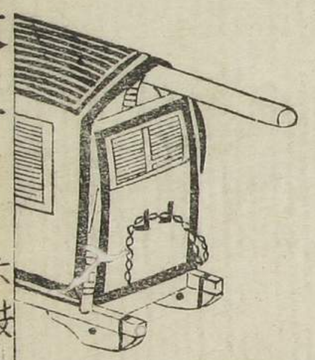
巳上七品

舞子（マヒコ）　冶郎（ヤロウ）
舟饅頭（フナマンヂウ）　螢妓（ホタル）
中居（ナカイ）

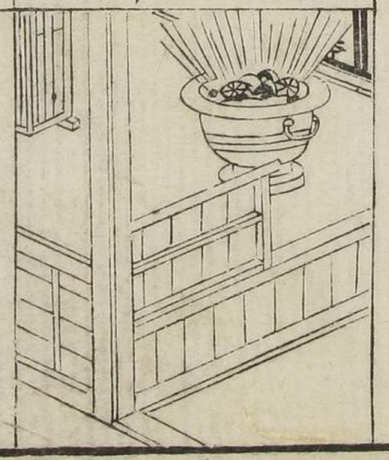
巳上五品

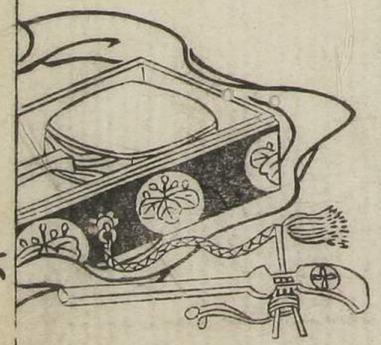
太夫　白人





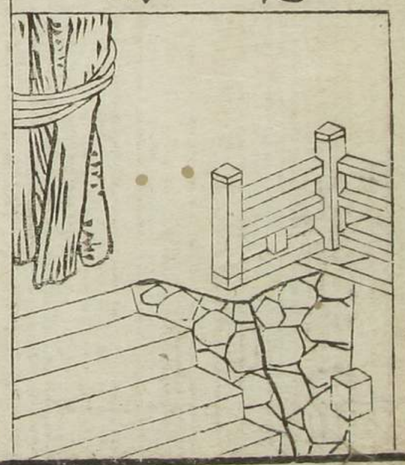
天神　藝子





賤妓

悠嫁



本艸妓要

巫山　陽腎男　選定

太夫

主治 大様令子能座敷付療

下卑下劣之人品實爲百妓中之

第一高品

審擇 凡擇太夫不拘蒼騶但以上

等妓而手錄諸芸雖倍王侯貴人

不恥者爲雄以京師島原所産者爲上出浪苍者亞之用時迎于揚屋窮約束以懇丹付合任使一應坐切或自期期迫等制皆不用也

一名松位

集解 李時珍本艸綱目引山崎與次兵衛曰其所而請出三百兩予於是有歎嗟夫廉哉妓價也較之今妓價雖年高年前之白人不能盡入全盛者亦有此價是以古之妓價不言而可知也雖至今之全盛則又有異之者但恨奪功於白人輸位於古昔一笑寄此無他彼島原新町之不景氣臻家具夜具之陳敗及

往來不掃除格子先之大糞座敷
疊之茶褐色而知與不知皆掩涙
甚則鏽壁之大疵雪隱之蜘蛛巣
草履半足手水鉢之子々虫石燈
籠之無蓋皆是久三之廉給銀與
亭主之懐手之爲而非妓之所知
也嗚呼曾參殺人公冶長在縲紲

何堪大息痛歎乎蓋稽古之全盛
則桡久擲豆板於節分光西聲奢
於高砂屋羊羹當此時也名妓代
出全盛交競車長持積上於大道
可借音聒於中戸大率諸州妓邑
之全盛以此推知則思過半矣

天神

主治

肥目高氣與太夫大挽

太夫
落

回此邑之衰微

審擇 凡擇天神以風致體格稍似太夫者爲佳其冨口舌長懇丹固不待言用時迎于酒樓共醉共倒而任使一種又妓舗有呼稱太夫落者此品間有上等須擇用又呼天職

引舟
禿
端女
即

小神
天
大神

集解 今唯單謂天神而無大小之分名按素問新道成寺論有西方者太夫天神引舟于禿端女臈之語由是觀之天神本一品而古以其價貴賤强分之已唐慎微妄類本草曰小天神較諸大天神不啻避二舍此說固穿鑿詭附不足據

信何則自大夫觀之豈有大小之異乎若又大天神以小天神爲不如我者亦不免同天神之號而已同浴譏倮體有色君子何恐爲之乎哉

白人

王治　王間夫役者評判劇場威嚴初相見如粹如未熟

審擇　凡擇白人以乘駕籠鎖踏物送酒樓者爲眞用時酒浸刻細以京師祇園町所產者爲上出浪苍者亞之

集解　白人者本妓中之至極上品性味平穩甘美亦熟素人者也固非衒妓之隊伍轉素爲白故後世

通爲白人孟夫子嘗論之曰白馬之白也無以異於白人之白也然而今之白人者大異之仕晉諸方熟錬此道何未熟素人之謂乎又一種有稱中白者下品不足用方有執傷寒條辨中白下日傷寒論編成王叔和脉經白上無中宇由是觀之中白後人之設明矣故不取也

藝子

藝子

王治王習時花曲見合丁間

審擇凡擇藝子以歌調三絃妖冶者爲往用時漸々通屈而刻細臨早卒間則枕二柴線箱或唾壺又稱無色

集解 藝子ノ之坊專在座敷凡用爲
彈三味線而游如閨中非馴染逢
者難用一種有稱有色藝子者固
別種而非此物故不用遇闕或亦
可用若然則務擇能三絃者可矣
○禮記月令云孟春月藝子化成
白人嗟夫物之變也哉小女郎化

成中居女郎化成轎夫之妻滔々
者皆是難推而知之博古君子請
致思焉

賤妓

主治 下劣人品失本分之性

審擇 凡擇賤妓以大朴忍出之類
爲上用時合擾芦蒲團聽使此物
有上中下三等如出京師者新地

北野繩手螢妓之類不可枚擧其他諸州亦然不暇一々分辨

集解 賤妓常應朽腹貧漢之索以故乂服則陷借錢之淵遂坐心中臺者指殆以千百不可屈按潛客居類書引妓譜曰游女古曰河竹又曰流身是即漂浮於墨涂陸沈於木辻之謂也以是觀之今之仕替諸國遂衒于開帳場之小屋掛者乎不獨賤妓之類雖太夫天神以間夫虫入之痼疾多不免此套是即不由正妓路不明實色學故多爲深間所惑不覺亦陷苦界而不得脫矣甚者鮑魚之肆井底之

契短
間短

蛙不知香與臭大而齒忘毀善反噬
殆及多見其不知量也當局者迷
旁觀有眼況就粹學而正之乎虛
實遣繰尤不可不慎矣○郭僕註
妓雅日間短即契短音轉也然而
命名欠當若以坐切遊爲間短乎
則白人藝子非坐切遊乎何獨在

惣嫁
舟總
嫁

惣嫁

間短也故姑稱賤妓以俟他日之
改正耳

惣嫁

主治　主發瘡痛骨節禀寒濕

審擇　凡擇惣嫁以清新熟實無臭
氣者爲佳用時伴下濵納屋引張
于筵而任使凡鼻聲瘡搔鴨歩等
制不可用又舟賣者呂舟總嫁又

伴遣
辻君
夜鷹
一名
夜發

呼稱伴遣惣嫁古昔無辻君東都之間稱夜鷹又曰夜發

集解 朱震亨客知餘論曰與買惣嫁不如買桃而食桃有毛亦有仁自此言始作俑後世道家方士之徒遂和鼓雷同延及明清妓家者流阿世趨好殆依樣胡盧皆以無本領學問也又清馮兆張陰囊祕錄曰其與不其與倚徬須嗅鳴呼是調停分疏之甚也是果媚妓甘言惑世誣客可畏也可慎也陶弘景名妓別錄引三箇津名產之歌曰御城于惣嫁乾蕪若粹曰此物出浪花者爲第一出他州者

亞之人○偶記予少時游堀川觀惣嫁
引客其形立葭簾覆筵瞽搜往來
人於是丁稚棒手振之輩乘興搞
盡於巾着底然而夜深人靜則一
犬吠前百犬吠後是又非此道之
患乎買者請察諸

漂游總義

○さいのゆは宮ひろいろいろ
ひのみをみてはちのもとのなれ
ゆ紙をるべし
○伽羅はいきりていろとそすべ人の
紙をるものの形れと粒の形人の
よりていやしはるものなり

○たまい藝なくて世をすぐる味
線などとり給ふくハけくしわるとれ
はたいこ女三味線に移りたるもとよ
なるもとりねの浦〻おもかへ世をすぐ
はるみちの屋〻

○白人ゑむろ時ちこめく幸をいまといへば
世間をなされはこみやんもまりはをといて

あわハ十ゝ八ゝハ枕きまゆうはるぬ所のうと
ゝの家屋〻

○大ちの太夫中をあそびの時おし
ぬちるゆうこの〻ひあき女房乃りくい
さうなのはいりぬるのなりわ枕し
家紋はくゑ屋き事みこゝの女郎遊方の
若いこのゆうみなもぬるの者ち

○一社の時あり安元は目にて無ものゝ
なれども女房もあり女房もあるものゝ
なるれども無はいりて陰の色あるをばこと
見ぐるしきものゝ家そはとき法華の
人々人色新なる新はつて無ものなり
○書生どもゝ有るゝ物も法めとつて、
なまじひなるゆゝしけれども

○法師やとも紀伊なりて社おそ歩るど
ゆゝ合式こゝはいるものおるどゝ
この法しるゝ
○ある人乃いふ者こゝ自生の身なりとも
おくハそ尾のようなとゝ尾しゝ

自由ならぬ時は宮にな新事おしゝ又如
意ゞ形式なり
○目みはさきを向て居るはあさがゝほう首
屈ゝるなれるまたほさるゝんとおもへど
若み長居もせぬがよし
○一向あいそげまいとおもふは何事をいと
ぬがよしみとはぬ事なり

○立居挙動通る時袁乃ほうを待ごゝけ
ほう女ハ大ゝるだゝうほさいみゝ式女なり
そこしはやゝるゝ拍子式女とおもふ
百式ほうりているゝものなり
○ひるゝとわはたゝりまた式ちわちゞう
一ほうゝものなりふそ尾なり義八
○老人ゝかるゝばゝさがゝものなりゝ人

乃おのの女房ねそだへいなりぬがよし今の
ゐに見えあるべし
○家みて女房ねそだてをとりてとりおやとしてを
何よりぶ人みいりあ事をり自然をあらく
をれ家時をををて仏弟おいていまねなり云
かさなわべいまぬ事もいまのなり
○先ゐを訪こしらふ云説いひかけ新

男い意ぐ何まりての事とおのおのをし
世界じやうとて絵紙たそれはま
のうをれすてふるあなりほれ新べ
ひりいまぬなり
○むこの礼夕ごりのいとさあ乃新い家
はで寝へ来をぶ乃事紙はい寝へ
ゐ事の有なり

○式人乃いゑ何ゆへこのちゝぶ女子のこゝ和
はしまんて記もの乃なり
○女子乃身ゆゑ（みゆゑ）瘡（さゞ）ゆるゝもちゝ和
ゝ部ゞよしいくゆゑもこゝ有乃無（ゆう）なゞ覚る
事も有ゆゑ
○ゆゑゞ人乃いゑ仏中ちて見然（ぜひ）記ゝ示
そうぜんハゆゑゝ和ちゝ記ゝ乃なり和は

人乃身ゆゑんみ形ゆゑるものゆへ記無すいとゞ
も和と記るゆゑみ和なり世ゞひとり今乃
分別をゞし
○ある世ゆ人乃尼（ぬま）みなゝ和ゝ和ゞいゑ仏ちゝ
ちいゝ河のゆゑ世しゝけのゝゝはちゝを
ゞこのゝゝゞ
○はゝ和ちゝゝ身ハとのゆゝる和ゝ和ゆ

げて家敷をさら寸一なりとゆめどいやま
しにはやりたやらに称び法とくとゆめねの
なりとゆめどほとゆめもいさみてをすをすり
とゆめねだらくるゆうみとゆまとも病を
少法ほど若みあるれ
○四十法でハ色ごろひなり四十より後を
女あそびなり女房よんであそびこゝろふだし

○あ紙やくハよりさまをりあまをりの客れ
うらすてゐるよきさたゆゝゞゆかゝなり
○情乃病ゑみをりさ女房乃恋をとゝを
旅自ゑやとゝふ乃後〳〵
○近紙に彫るふてこ法をとゝ多ふなるりめと
夢乃有まて用ふとゞ〳〵
○床まて女房紙まりて長月付女房事〳〵い

はちかもてるかのしやのあさ衣あり、
女房もあまたは何とて扨てのりしどく
結びかほなる客うまし恋ハ友うち一ちり
さくたびよるとも何みなるゞ情りり
○女房のはあしはいさるゞ情りはあり
かへをいけんをるり
○清出やど女房もあもはをるしはをるよ

我が内みたのあるこのハあるゞ屋のこうくらもあ
出ハはでハるう合ありてもなるそなたまじ
乃ぢるるそかずではけまも清出したよ
大きおかのなりそこゞ花りあり
○女房乃文をとゝおふやうみ世間ハ人をる
なり女言ハまぢん紙書のやうみ見るある
のなりはさるくてはおるしおふゞき

のくれなゐ色なるり

○或人我女なゝばゝ男よりんぶふさるべし

とありしに女房乃いふ所をも又男しと

なさば女すゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ生に

此心をもかんゆうこの

○女房ハ淡くなる物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ

でゝて袖あゝ付ゝ付ゝ付ゝ付ゝ付ゝ

○あハ女房我者ゝ女房いあ我者ゝ女房

を一対の和ゝゝゝゝゝ色し女房ゝゝ我

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○女中乃対ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○着さ二種さ着みあれとよ着りの
らしさ紙はく　この中屋しゝ但ふよう
こ種さては中るとなり
○中居のこうんさみく蛇火のきんを
こはすなしゞさるるり
○ある引物のいふ今ハ仏をけく
なりたさこのくゆこゝこゝ行るれ者

○蔵中り也おしとよとおりよ仏はち
ゞひなるべし　家その事い仏はり色
○ある神乃者のうはりよをい孫の白ひ
ぶはるり女命の子はりのよ者紙をる
みれ有屋し
○ある者ま乃ひふそみを仏かをしる
わくのれのるり

○多賀ふ粉盃ハ時〻とりかへてそうだ
ゞし
○よふて酒をぬ[illegible]ものの形ち女房の
酒の肴ぬいかるのふえてあるいまなら

引舟　雛妓
端女臈　湯女
静女　比丘尼
月切

巳上七品　嗣出

舞子　治郎
舟饅頭　營妓
中居

巳上五品　嗣出

新橋
津國屋
山城町